

---

icky Xanadu **【不快な桃源郷】**

満月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

icky Xanadu【不快な桃源郷】

### 【コード】

N9580W

### 【作者名】

満月

### 【あらすじ】

黒き太陽『黒陽』と、人の心を邪に変える『魔力』。それらによって、地球上の生命は約半数以上が死滅した。一体なぜ？どうしてこのような事態が起こったのか？『黒陽』の謎を解くべく、神々の恩恵を受けた者達『聖騎士』が立ち上がる。

わたしの名はシア。だが私はすでに死んでいる。そのことについては触れないでおこう。

さて。これより紡がれる物語は、世界の命運を握る者達の一人である少年の物語である。

『西暦2020。黒き太陽が目覚め、この星は狂いし人の手で瞬間に滅びてゆくだろう。だが、滅びを止めるべく立ち上がるのもまた人である。 予言者シアの手記』

黒髪の少年の見る、宙に浮かんだ文字には、そう書かれていた。

ix イクス 序章

日本。かつてこの島国は、そう呼ばれていた。そう。

西暦2020年1月1日、黒い太陽が現れるまでは。

かつての太陽を浸食し現れたそれは、まるで何かの生き物の眼のようだった。

恐ろしい、悪魔の眼だ。

やがて黒い太陽は、地球に向けて『何か』を吐き出し始めた。

それは目に見えない、不可視のもの。

その『何か』は、人々の心を狂わせていった。

『何か』とは、『魔力』である。それまで世界に存在し得なかった

力だ。

『魔力』に乗っ取られ、意志など関係なく人々を殺してまわった者や、身体が耐えられず己が『魔力』に喰われた者。殺し殺され、死んだ者は数知れず…。

いつしかそうして、世界に残った人間は、数十万人ほどまで減ってしまった。

『魔力』に触れずに生き残った者は、いつからか黒い太陽のことを『黒陽』と呼び始め、それを滅びの神の化身として崇拜する宗教まで現れた。

人は、生きることを見失い、死を簡単に受け入れるようになった。

そして地球は荒れ果て、文字通りの破滅へと向かっていた。

だが、この荒れた星に、『魔力』を自在に操り使いこなす者が現れ始める。

世界を見放さなかった神々の恩恵を受けた人間、『聖騎士』。

その者達は、『黒陽』の謎を解くべく、地球、宇宙の命運を賭けた運命を歩み始める。

そしてこの物語は、その『聖騎士』の一人、しずたにみつ静溪満月の物語である。

【第一章】 Goddess of moon - 月の女神 -

…空は、暗い。天気は曇り。仮に晴れていたとしても、さほど明るくはないだろう。太陽が黒陽であり続ける限り。私の名はシア。私はこのまま、救いのないこの廃れた世界を見続けるのだろうか。

iX 第一章

「…つと。これで荷物は最後かな？」

灰色の壁で四方を覆われた小さめの部屋。彼は、両手で抱えていた段ボール箱を、すでに部屋の隅に積んでいたいくつかの箱の上に乗せる。箱を運んでいた彼は、見た目は15歳くらいの黒髪の少年だ。「ふー。あれっ、まだあつた？」

開きっぱなしだった、これまた灰色の扉の向こうから、少年よりかは少し背の高い赤毛の少女が現れた。彼女も箱を持っていて、それを少年の隣に置いた。

「…よいしょ。もう、私がまだ運んでるの忘れてたの？」

「ごめんごめん。てつきり最後だと」

「もう…」

こちらの少女も見た目は15歳くらいだ。その後ろから、さらに老人が現れた。老人は手には何も持っていない。

「いやいや、ありがとうございます。引っ越しの手伝いを最後まででしていただいて」

どうやら少年と少女は、この老人の引っ越しの手伝いをしていたらしい。しかし、なぜ引っ越しの手伝いをしていたのか。その理由は、二人の職業だ。

「あー、『ミツキ』さんはどちらでしたかな？最近物忘れがちと激しくてな…」

「ぼくですよ」

そう。この少年の名は『ミツキ』。そして、

「では、そちらが『ユウ』さんでしたな」

「はい」

少女の名は『ユウ』。

「では、『シスタニミツキ静溪満月』さんに『カクガヤユウ鶴ヶ谷優羽』さんのお二方、今回の

『何でも屋』のお仕事の報酬は、こちらですじゃ」

そう言つて老人は、小さな箱をミツキに渡す。それを受け取り、中身を確認してユウに渡した。

「『メビウスリング』、確かに頂きました。では」

そう言つてミツキは踵を返して部屋から出ていく。老人に礼をし、ユウも続いて出て行った。

二人の職業は、『何でも屋』。人探しから裏での物品の流通、殺人までよろず承る者の総称だ。だが、この職の仕事の大半は常に危険がつきまとう。なぜこの二人がこんな仕事をしているのか。その原因は、この世界、この星自体にある。

ミツキとユウ、二人がいる場所は、かつて『日本』と呼ばれた島。実は、もう『日本』以外の場所には、あまり人がいない。いや、いられないと言うべきか。西暦2020年の黒陽の事件から10年たった今、幾度となく訪れた大災害と小隕石落下、そして、魔力に染まり狂つた人による殺戮の嵐で、世界各地は荒廃していった。その悲劇から生き残つた地が地球上の各地にたった12しかないうちの一つが、日本。

「…ユウ。これ、いる？」

ミツキは、老人にもらつた小箱の中身、メビウスリングを手のひらに乗せて、隣を歩くユウに差し出した。

「え、くれるの？いいの？綺麗なのに」

ユウは少しミツキの方を気にしているようだ。いいの、いらないと何度も聞いている。

「僕はそういうのは興味ないし。だったらユウが持つてる方がいいかなって」

「そう？じゃあ、貰うっ」

瞳を輝かせて、ミツキの手のひらからメビウスリングを取った。メビウスリングは、その名の通り輪の一方所だけが半分ねじってあるものだ。鉄で出来た輪で、穴は二センチもないところをみると、指輪用だろうか。

「あれっ、なんか裏に文字が彫ってある」

裏返したりくるくる回したりしていたうちに見つけたようだ。ユウがそれを読み上げる。

「『BRACK SUN』…。あのじいさん黒陽教団の信者だったのね…」

そこに彫ってあった文字を見てユウは少し落ち込んだ。黒陽教団というのは、その名の通り黒陽を滅びの神の化身として崇める、ある意味頭がどうかしてしまった人々の集まりだ。信仰している人は、少なくなつた人口の約四割もいる。以外と大きな組織だ。

「これじゃどんな呪いが掛かってるか分かったもんじゃないね！。

箱に戻しておこつと。ミツキー、箱箱」

「はいはい」

黒陽の信者は何をしでかすか分かったものではない。一説には呪いで国を一つ滅ぼしたことがあるとかないとか。いずれにしろ危険な物には変わらないはずなので、ユウはリングを箱に戻すことにした。「今度はもっとまともなひとが、まともな依頼を持ってきてくれるといいな…」

そんなユウの愚痴を聞きながら二人は『家』への帰路を急いだ。

低めのビルの間蜘蛛の巣のような路地。そんな入り組んだ暗い場所、二人の『家』はあった。だが、『家』というよりかは、鉄板

を何枚も使って困った『空き地』のようなものだ。ユウは、空き地のほぼ真ん中にある、つきはぎが目立つ赤いソファに走っていつてそのまま寝ころんだ。

「はーっ、やっぱりうちが一番だねーっ」

「ユウ、おっさんくさいよ」

「う、うるさいなっ。人のこといえないくせに。今朝もまた布団からはみ出てたんだから。オヤジミツキ」

「うっ。言っただなーっ」

狭い路地に小さな子供のような罵倒が飛び交う。ミツキとユウの家の周りには、ぼろ布しか着ていないような乞食が何人かいるが、こんな風景を見て乞食同士笑い合う。そんなものがこの路地裏の町の日常だった。

「きゃー、くすぐりたい、や、あははは」

「いてっ、蹴るなよっ、ぶっ、ははは」

二人とも早くに親を亡くしたが、まだ15、6歳くらいだ。まだまだ子供といえるだろう。微笑ましい喧嘩だ。そのうちに二人とも疲れて、アスファルトの床に寝ころんだ。

「…はあ。もう、本気で蹴らないでよ」

「だって、さ、ミツキがくすぐるんだもん」

「はは。…今日はもう休もうか。依頼人も来なさそうだし」

「うん。寝よう」

日も落ちる時間だ。まさか夜中に仕事を依頼しにくる人などほとんどいないだろう。むしろ朝の方がよく来る。家の一角にある屋根の下のちょっとした高床のベッドが二つ。そこが二人の寝室のようなところだ。

「じゃ、おやすみ、ユウ」

「うん。おやすみっ」

そうして二人はほとんど沈みかけた黒陽が見守る中、眠りについた。

ガンガンと頭の中に響く謎の音。それが鉄板を叩く音だと気



付くのは直ぐだった。

「助けてくれ！このままじゃ殺されちまう！お願いだ！……」

ついでに男の人の声も聞こえる。全く迷惑な目覚ました、とミツキはちらつと思ったりしたが、すぐに振り払って飛び起きた。ユウの方は少し早く起きたようだ。

「どうしたんですかつ！？」

ユウが先に話を聞きにいった。どうやら緊急事態のようで、自分は先に戦闘用の準備をする。ついでに男の人の話も片耳で聞く。

「教団の奴らだ！滅びを信じない者は皆殺しだってよ……！今こっちに数人來てる！死ぬのはごめんだ！！俺も戦う、助けてくれ！」

男の話の内容は大体そんな感じだった。腰の後ろに自分の腕ほどの長さの剣を、獣皮の鞘に入れて留める。男の話が終わったようで、ユウがこちらに早足に歩いてきた。ベッドの下のケースに入った長槍を出し、ユウに渡す。

「いい報酬が期待できそうだね」

「誰だつて死ぬのはやだもん」

命懸けにしては軽いやりとりに見えるが、当の本人達は至つてまじめだ。間もなく外で素手のままおろおろしていた男は、家の中に入ってきた。

「なあ、斧かなんかはおいてないか？流石に素手じゃ戦えねえ」

きよろきよろしながら空き地のような家の中を歩いている。

「うーん……。ミツキ、心当たりある？うちにそんなもの無いと思うけど」

ほとんど考えたそぶりもなくユウがミツキにきいてきた。少し考え込んだミツキは、そういえば、と言ってすぐ近くにあった布をかぶった長い物を指さす。男がその布をとると、そこにあったのは……。

「こ、こりゃあ……。大丈夫なのか？てか何でこんなモンが？」

かつて標識に使われていた、バス停だった。

「それくらいしかないよ。ビルの中を探しても無いだろうし」

「……ま、仕方ねえ。無いよりましか」

そう言つて、男はバス停の根元を持ち、肩に担いだ。なんだか素手  
でいるときより頼れそうな雰囲気か漂つてきた。しかも一人で熱く  
なっている。

「誰も死にたくなんかないだろうからな、乞食だろうがなんだろう  
が一応守つてやらにやあ。罪もない奴らをあんな理由でぶつ殺して  
いい訳ねえ。あいつら人間じゃねえ!…つと、自己紹介がまだだつ  
たな。俺は漣龍也だ。二人のことは知ってる。この辺じゃ有名だか  
んな」

男 龍也の自己紹介が終わつてから、教団の人間達が来るまでは  
数分もなかった。

「一、二…。六人。一人は幹部かな…。厄介だよ」

ミツキは目が良い。結構離れている曲がり角から来た教団員の数を  
すぐに把握し、服装まで見分けた。普通の信者は黒いフード付きの  
ローブを着ているだけだが、幹部クラスは金の線やらバッジやらを  
ローブのどこかしらに付けているのだ。こちらの姿を確認すると、  
すぐによつてきた。はじめに口を開いたのは、黒陽教団の幹部らし  
き奴だ。

「…ほお。我らの教を信じぬどころか、始めからやり合つつもり  
の者がいるとは…。愚かな」  
すぐにユウが言葉を返す。

「あなた達がすぐに引き返すようなら、戦わないこともないんです  
けど?」

後ろにいた大柄な信者が前に出てきた。威嚇のつもりか指をパキパ  
キ鳴らしている。

「おーおー。命知らずな嬢ちゃんだ。ウチの教団は凄いつてのに」  
前に出た奴以外が後ろに下がる。どうやらこいつが主戦力のようにだ。  
武器は…なし。それを見てユウが振り返る。

「…だつてさ。どうする?ミツキ」

「…別に。どうもしないよ。ただ…」

そうミツキが言ったときに、前の信者が身構えて寄ってきた。一人で前にいる信者はボクシングのような構えで顔を守っているようだが、体格にあつていない。胴から下がから空きだ。

「…こんなのは、僕一人で良い」

そういつた刹那、ミツキが驚異的な速さで走った。その速さに驚いて寄ってきていた奴は動きを止めて硬直した。数メートルはあつた距離を一気に詰め、ミツキは懐に潜り込んだ。

「エイッ！」

「うぐつ、ぐほ…!?」

男の体格に合わせた、鳩尾狙いの正拳。腹を押さえて姿勢が低くなつたところで、腰の後ろの剣を逆手で一気に抜く。

「許セッ！」

右手で抜いた勢いのまま、低い位置に来た首を横尻ぎに斬る。声も出さず首から鮮血を吹いて男は倒れた。恐らく、即死。

「ミツキ、何もそこまで…」

「やらなきや殺されてたよ。本当は僕だつて殺したくなかつた」

わずか数秒のうちに仲間の一人が殺され、残つた信者達はうろたえていた。一人を除いて。

「…これはこれは。かなり危険な反教行為ですね。命一つには相應の対価を払っていただきましよう」

幹部クラスだ。その男のローブは近くで見るとかなり豪華な装飾を施してある。どこから出したのか、既に左手には剣を持っている。

日本刀だ。

「…行け」

そう一言言っただけで、後ろに残っていた四人は去っていった。おそらく教団の中ではかなりの権力者だ。

「さて、あなた方には死んで貰いましょう。特に、その小僧はッ！」

突然切りかかってきた。刀を降ろした状態から、斜めに右上へ。狙いは、ミツキ。

「ッ!?」

何とか体を捻ってかわした。…異常な強さだ。

「ユウ!」

「言われなくても!」

ミツキが呼ぶ前にユウは走り出していた。トの字をした槍の穂先を限界まで突き出す。

「たあっ!」

「遅い」

しかしそれは、男のローブをかすめることすらできずかわされた。そのまま、掴まれる。

「雑魚め。お前から死ぬッ!」

男が刀を振り上げた瞬間、そいつは横へ吹き飛んだ。男を捉えたのは、リュウヤの投げたバス停。

「やらせやしねえよ」

地面に転がったバス停をリュウヤが拾い上げる。吹っ飛んだ奴はとしようと、もう立ち上がっている。あり得ないタフネスだ。

「…ふ、ふふふふ…」

不気味な笑い声を上げている。そのとき、そいつのシルエットが一瞬揺らいだ。こちらに向けた眼には、嫌な光が宿っている。

「ふふふふ…。皆殺したミなごろシだミナゴロシダアア!!」

狂ったような声を上げて、左手に握った刀を振り上げた瞬間、風が吹いた。それにいち早くミツキが反応する。

「まさか…!? 皆目を庇って!」

そう言った瞬間、三人の間を風が吹き抜けた。風が身体に当たったところから、次々に切り傷がついていく。これは…。

「ま、魔法…!」

風がおさまったときには、三人とも血塗れで膝をついた。風に乗って飛んできた不可視の刃に切り裂かれて。

「あッ…う…!」

「な、なんちゆう力…」

「いたあ…ッ」

誰も立ち上がれない。

「ふフはははハハハ！」

あの男は、どうやら魔力で狂っているようだった。ミツキたちの傷だらけの姿を見て笑い声を上げている。

「こんな所で…死ぬ…のか？」

「やだよ…いや…」

「死ぬるかよ…ゲホッ」

誰も、立ち上がれない。男は、刀を振り上げた。動けない以上、覚悟するしかない。死を…。

「消え口おおオ！」

男が、腕を、振り下ろした。

風が…。

「っ！………え？」

風が、吹かなかった。ユウは、慌てて男の方を見た。男は腕を振り下ろした状態で止まっている。手には、刀がない。

「キ、貴様…ッ！」

男は、ただじつと睨んでいた。ユウがその視線を追って振り返る。

そこには、ミツキが立っていた。だがいつものミツキではない。髪の色が、黒ではなく、白。

「……………」

そのミツキは、じつと男を睨み返していた。気づけば、その隣には見知らぬ女性が立っている。その女性が口を開いた。

「あなたには、この子たちを殺させるわけにはいきません」

その瞬間、しばらく動きを止めていた男の目の前に刀が突き立った。それをほぼ反射で引き抜いて先ほどの風を起こそうとする。

「…させません」

口を開いたのは女性だったが、動いたのはミツキだった。ユウとタ

ツヤの前に、一瞬で移動する。そして、自分の得物を構え…。

「『天守壁』！！」

地面に突き立てる。男が風を放ったのは、それから一瞬後だった。

「死ねええエエ！」

またあの風が来る。ユウはそう思い、必死に目を庇う。だがそれは、はつきり言つて意味がなかった。恐る恐る目を開くと、目の前の空間で刀が止まっている。あの男の刀だ。

「…っ！今だっ！」

「俺も続くぞっ！」

ユウはこれを好機ととり、剣を地面に突き立てたままのミツキの横を走り抜ける。それをタツヤも追ってきた。狙う男は、素手。

「せええやつ！」

両手に持った槍を右から大きく振りかぶって、横凧ぎに振り払う。

その切っ先は男の胸を捉えた。

「ギっ！」

振り抜くと、地面に血の華が咲いた。男は斬られた胸を片手で押さえ、二、三步下がった。それにタツヤも続く。

「ぬえい！」

同じように、バス停を左から振り払い、勢いに任せて吹き飛ばした。

「…！」

男は体勢を崩しながらも、血まみれでこらえた。そしてそこを、ミツキが走り抜ける。立ち止まり、剣の血を払い、鞘に収めた。

「…『六門絶風』」

そう呟いた瞬間、男は地に膝をついて倒れた。アスファルトの地面が十字に削れ、男の腹と背中にも同じ傷が付いている。

「オノ…レ…」

そのまま男は倒れ伏し、絶命した。

傷だらけの体にむち打って、ユウとタツヤはミツキに歩み寄っていた。ミツキは、振り向かない。

「ねえ、ミツキ…えっ?」

「おいっ!どうした!」

ミツキは、振り向かないまま崩れ落ちるように倒れた。二人は慌てて駆け寄る。

「ねえ、ミツキ、起きて!」

ユウが抱き上げ揺り動かすが、反応がない。

「…気絶してるぜ。そつとしいてやんな」

「ええ。今はその方がいいですよ」

「うわっ」

「きゃっ!なに?」

あらぬほうから声が聞こえて、タツヤは驚いて声を上げてしまった。更にその声に余計にユウが驚いた。

「ああ、そんな警戒なさらずに」

声の主は、ミツキの隣にいた謎の女性だった。白と蒼を基調にした、美しい羽衣のような服を着ている。

「…あんた誰だ?この辺にいるような輩じゃねえな。名乗んな」

「随分な口ですね。…私の名は『月の女神』アルテミス。この『静溪満月』がいるというこの極東の倭やまとの地に、遙か西方からやって参りました」

その女性、いや『女神』は、そう名乗った。

【第一章】 Goddess of moon - 月の女神 - (後書き)

序章の投稿から随分と日が経ってしまいました。

読んでくれた方は、こんなものだと思って次章をお待ちください。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9580w/>

---

icky Xanadu【不快な桃源郷】

2011年11月20日17時57分発行